PROJECT

1930年代の地方民俗学雑誌の実践 ──高橋勝利の『芳賀郡土俗研究会報』

文 久野俊彦

共同研究 ● 日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動：1930年代から1960年代まで（2010-2012）

1930年代前後の日本民俗学の形成期には、自らの生活地域に根ざした伝承文化を発見していく多様な地域的文化運動が日本各地で起こった。各地方の民俗学雑誌が、同地域内や異地域間の実践を結びつける媒介（情報メディア）であった。本稿では、地方民俗学雑誌の実践例として、地域と部数においてもっとも小さな雑誌と考えられる民俗学雑誌をとりあげ、それを発行した民俗学者の構想と実践を紹介したい。この時期は、柳田國男らが地方の民俗学者を牽引して組織化した中央と地方の縦の関係性に目が行きがちだが、地域から日本を見ようとする彼らの実践や、個々の地方の民俗学者間の交流・ネットワークのなかから日本民俗学の形成をとらえ直してみたい。

「土俗」と地方

明治時代には今日の文化人類学（民族学）や日本民俗学は「土俗学」と称された。「土俗」とは、各地の風俗・言い伝え・伝説・方言などをさしたが、1900年代に入ると、「土俗」は台湾・朝鮮などの植民地の風俗をさし、日本の風俗・習慣を研究することは「民俗学」と呼ばれるようになった。中央学界の雑誌名を見ると、1918年に『土俗と伝説』が発刊され、やがて1929年に『民俗学』が発刊されたことに、学問名称の移行があらわれている。だが地方では、なお「土俗」が民間伝承をさし、研究会や雑誌の名称に「土俗」が用いられた。地方の民俗学者の意識と動向をさぐるには、地方の「土俗」研究の実践をとらえる必要がある。

柳田國男が引用した高橋勝利の「土俗資料」

柳田國男は「再び白米城の伝説に就いて」（1929）、「妖怪名彙」（1938）において、「高橋勝利君報」「芳賀郷土研究報」として、高橋勝利の報告を引用している。高橋勝利（1902-1996）は、栃木県芳賀郡逆川村（現在茂木町）の旧家に生まれ、東京の青山学院中学部（旧制）を卒業後、本郷洋画研究所に入り岡田三郎助から油絵を学んだ。その後、古美術に興味を持ち奈良の法隆寺に滞在した。20歳代の高橋が持った地域文化への関心は、はじめは古美術だったらしい。1926・1928年に宇都宮市の大谷寺観音や逆川村の安楽寺丈六仏に関することを、栃木県の雑誌『古代文化研究』『下野史談』に投稿した。その後は芳賀郡の農村において、民間伝承の調査を行い、1929年から1932年にかけて、『民俗芸術』『民俗学』『郷土』『旅と伝説』『郷土風景』などの民俗学雑誌に投稿している。発刊間もない中央学界の民俗学雑誌に、高橋の報告が掲載されたのである。また、愚か村話の昔話集である『栗山の話』（高橋1929b）を刊行し、謄写版で『芳賀郡土俗研究会報』を発行した。高橋は、中央や地方の民俗学雑誌に投稿するとともに、栃木県芳賀郡という一地方にあって謄写版の民俗学雑誌を発行し、地方から中央へ、また地方どうしの民俗学の交流をはかっていた。

芳賀郡では、よそでは高く評価されながらも、ムラではその人物の業績が知られないことを「ムラ半値」という。胸ポケットに調査手帳を入れ、マドロスパイプをくわえて農村を歩く高橋の姿は、ムラでは理解されがたいまさに「ムラ半値」であった。高橋は自らの地域の民間伝承を雑誌に掲載して全国に発信し、地方から日本の民間伝承をとらえることで柳田國男や南方熊楠らと交流し、小さな地域から日本民俗学の形成の一助を担っていた民俗学者であった。

1932年以降、家業の郵便局長に専念した高橋は、民俗学の活動はほとんど行わず、1944年に民間伝承の会に入会して『民間伝承』へ一度投稿したきりで、1962年には郷里をはなれている。そのため、『全国昔話資料集成18巻　下野昔話集』（岩崎美術社1975）に『栗山の話』（高橋1929b）がおさめられた以外は、高橋の民俗学研究は埋もれたままであった。しかし、晩年の高橋は、雑誌を発行していたころの著作を『南方熊楠　「芳賀郡土俗研究」』（高橋1992）にまとめた。これが契機となり、若き日の高橋が、昔話研究者として柳田國男や佐々木喜善と関わっていたことが明らかにされた（石井1998a；1998b）。

ムラから日本・世界を見わたそうとした『芳賀郡土俗研究会報』

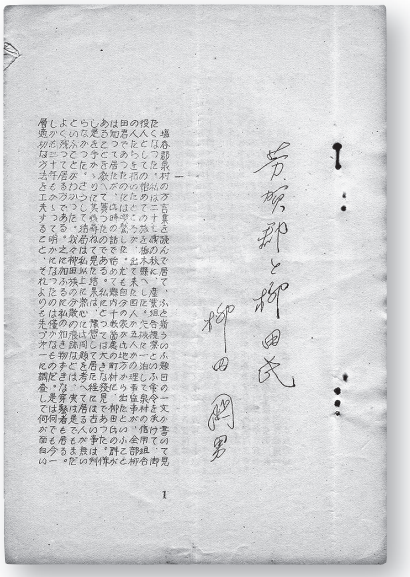
20歳代の高橋は、性に関する世間話39話を集めて、『猥談集』2冊（高橋 1929a：3-5）を謄写版で発行した。これを柳田國男、変態研究の北野博美、民俗芸術の会の小寺融吉、神話研究の中田千畝、民俗学の中山太郎・大藤時彦などの中央（東京）の研究者に送った（石井 1998a：297-300）。地方の研究者では、佐々木喜善（岩手）・橘正一（岩手）・胡桃沢勘内（長野）・鈴木光重（神奈川）・小野喜一郎（福岡）などに送り、性に関する資料の返信を得た。とくに佐々木喜善からは多くの教示を得ている。高橋は、同年10月に『猥談集』を増補改訂した41話を『性に関する説話集』（芳賀郡土俗資料第1編、高橋1992に再録）として刊行した。これを柳田に送ると、「性は南方君の世界だから送るように」という指示があったので、南方熊楠に送った（高橋 1992：230）。これがきっかけとなり、南方が高橋の雑誌に寄稿することになった。

『芳賀郡土俗研究会報』は1929年10月の第1号から1931年10月の第2巻5号まで続き、合計17冊が発行された。高橋は自らガリを切って寄稿者の原稿をなぞり、和紙の半紙に謄写版印刷し、半折してこよりで仮綴じにして70部作成した。高橋は、会報第2号（1929）の「お願ひ」で次のように呼びかけた。

> これまでの郷土史研究者は、形の残つてゐるものや、書いたものをのみ目をつけて、無形のもの、即ち我々が先祖から代々言語を通して伝へられたものや、日常の行事の間のさゝいに見ゆるもの事には、至つて冷たんであった。（中略）その土地に即した郷土の色があり、郷土の生活がをりこまつてゐる。その言葉──方言の研究に

も少し注意を送つて下さつてもいゝ。或は俗信に年中行事に、伝説に、民間説話に。これまでの郷土史研究者から見れば、（中略）書いたものもなくて年代もいーあんばいであつた口碑伝説なり説話なりも、年代が合はぬから悪いと云ふ理由で捨てるべきではない。年代や何かよりは、その話の内容に含まれてゐる我々民族の生活の一端の方が郷土研究にとつて有難いではないか。それも一つの方言、一つの話からばかりでは何の得る所もないけれど、これを全国のものに、又は広く全世界のものに比較して見れば、そのよって来る所が明白になるに違ひなひ。で我々は郷土の研究を我々の身辺にもつて来た。

『芳賀郡土俗研究会報』第２号（1929 年 11 月）の書影。右端１箇所をこよりで綴じた。２号から表紙画がある。高橋は東京の本郷美術研究所で洋画を習ったことがある。



『芳賀郡土俗研究会報』第２巻第３号（1931 年４月）に掲載された柳田國男の「芳賀郡と柳田氏」。高橋は柳田のペン書き原稿のタイトルと署名をなぞってガリを切った。謄写版雑誌ならではのわざである。柳田の原稿は遠野市立博物館に現存する。

これは、柳田が口碑伝説などの民間伝承を研究対象として、年代と固有名詞に拘泥せず比較研究を行うべきだと主張する「郷土誌編纂者の用意」（柳田編 1922［1914］）に沿っている。それ以上に高橋は、日本人の生活を明らかにするために、無形の民俗事象を日本全国、全世界のものと比較して、「よって来る所」つまり変遷を明らかにする研究を、「我々の身辺に」行おうとした。これは、やや後に柳田が「郷土研究と郷土教育」（1933）の講演で、民俗学を「郷土で」研究すると述べる主張と同じである。柳田の『民間伝承論』（1934）・『郷土生活の研究法』（1935）が刊行される以前に、農村青年が民俗学の方法論を述べていたことが注目される。

高橋による民俗事象の収集と比較は、『芳賀郡土俗研究会報』誌上に実現した。執筆者は誌名に反して栃木県芳賀郡の人は少なく、多くは東京および日本各地の民俗研究者である。中山太郎・南方熊楠（「芳賀郡土俗資料第一編を読む（一）」）・柳田國男（「芳賀郡と柳田氏」）が寄稿したほか、橘正一（岩手）・菊地一雄（岩手）・島村知章（岡山）・村田鈴城（東京）・金城永朝（沖縄・朝鮮研究）・村山智順（京都）らが短信を寄せた。これらによって、日本各地及び朝鮮の性に関する資料が掲載された。高橋の雑誌の対象範囲は、当初は誌名のとおりの小地域であったが、やがて日本全国を越えて海外にまで広がっていった。

地方雑誌によるネットワークの形成

高橋は、日本各地の地方の雑誌に関心を持って民俗学界を見わたしていたことを、『芳賀郡土俗研究会報』第５号（1930）の「編輯后記」に次のように述べていた。

> 一九三〇年の民俗学界益々多事になりますことゝ喜ばしいのは「民俗学」「民族芸術」「旅と伝説」などの大物は別としても、地方々々の同志が筆をとつてる雑誌がこれまで「岡山文化資料」やこの会報（引用者注『芳賀郡土俗研究会報』）、愛知県の加賀氏が出してる「土の香」、浜松の飯岡さんがやつてる「土のいろ」などあつた所に、今年からは青柳さんが「佐渡郷土趣味」、山本さんが「採集籠」を出されることになり、その外各地の同志が新しい陣容を立てんとしてゐる気運がうかゝはれます。共に手を握つて進みませう。（引用に際して句点と濁点を補った）

1930 年代は地方の民俗学雑誌が多数生まれており、佐々木喜善も 1932 年に仙台で民間伝承学会を起こして雑誌『民間伝承』を謄写版で発行した（小池 2011：54-59）。高橋は 1931 年に、ともに謄写版で 1930 年に創刊した『土俗と方言』（盛岡）・『愛媛県周桑郡郷土研究彙報』に投稿していた。少部数の謄写版でも存在しえた地方雑誌というメディアは、地方で発行するものに中央の研究者に寄稿を依頼するという受動的な運営ではなかった。当時の中央・地方の雑誌には短信欄が設けられており、地方の研究者どうしが、雑誌を媒介として手紙で短信を送りあい、短信は雑誌に掲載されて交流が顕現化した。短信を含んだ雑誌によって中央と地方、地方と地方のネットワークが形成された。地方が中央に資料を提供するという中央集権的関係ではなく、地方から見れば中央も一地方であり、その地方ごとの同志が手を結びあったのである。今後はこのような中央と地方の雑誌に重なりあう人々の共時的関係性の研究が期待される。

【参考文献】

石井正己 1998a「高橋勝利と昔話研究」『東京学芸大学紀要　第二部門人文科学』49：289-305。
――1998b「柳田國男の高橋勝利あて書簡」『時の扉　東京学芸大学大学院伝承文学研究レポート』1：19-21。
小池淳一 2011「雑誌と民俗学史の視角　石橋臥波の『民俗』と佐々木喜善の『民間伝承』」『国立歴史民俗博物館研究報告』165：47-62。
高橋勝利 1929a『猥談集（栃木県芳賀郡土族誌料第１編）』芳賀郡土俗研究会。高橋は謄写版で「土族誌料」と表記して発刊した。
――1929b『栗山の話（栃木県芳賀郡土俗資料第２編）』芳賀郡土俗研究会（活字版）。
――1992『南方熊楠　「芳賀郡土俗研究」』日本図書刊行会。
柳田國男編　1922『郷土誌論』（爐邊叢書）　郷土研究社（初出は 1914『定本柳田國男集』第 25 巻 pp. 5-13　筑摩書房）。

ひさの　としひこ

東洋大学非常勤講師。専門は民俗学・説話文学。寺社縁起・絵解き・聖教典籍等により、伝承文化と文字文化との関係性を研究している。編著書は『一四巻本地蔵菩薩霊験記』（共編 2002）、『偽文書学入門』（共編 2004）、『絵解きと縁起のフォークロア』（単著 2009）、『修験龍蔵院聖教典籍文書類目録』（単編 2010）『篁篇伝・陰陽雑書抜書』（共編 2010）。